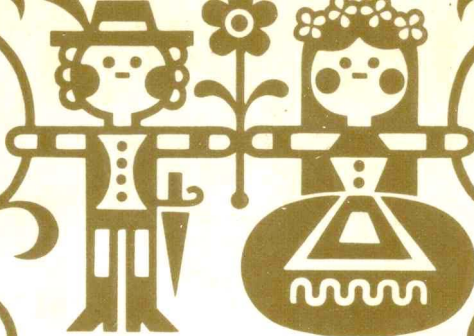




こどもの
世界文学



トペリウス, サカリほか

こどもの世界文学20 神宮輝夫 ほか 編集

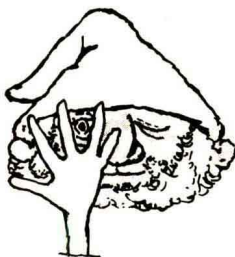
ツルク城の小人ほか 渡部 翠訳

講談社 1972

238p 24cm

内容：〔トペリウス〕ツルク城の小人 バルテル
 くんの冒険 ミルザ王子とミリヤムひめ
 〔スワン〕ベトリと魔法使い

サカリ＝トペリウス ほか



こどもの世界文学 20

ツルク城の小人 ほか

昭和47年12月12日 第1刷発行

昭和53年 第7刷（A）

作 者 サカリ＝トペリウス ほか

訳 者 渡部 翠

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111〈大代表〉

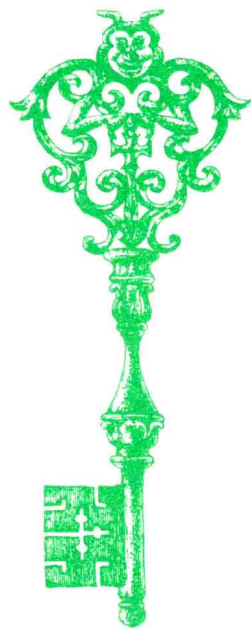
郵便番号112 振替 東京8-3930

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

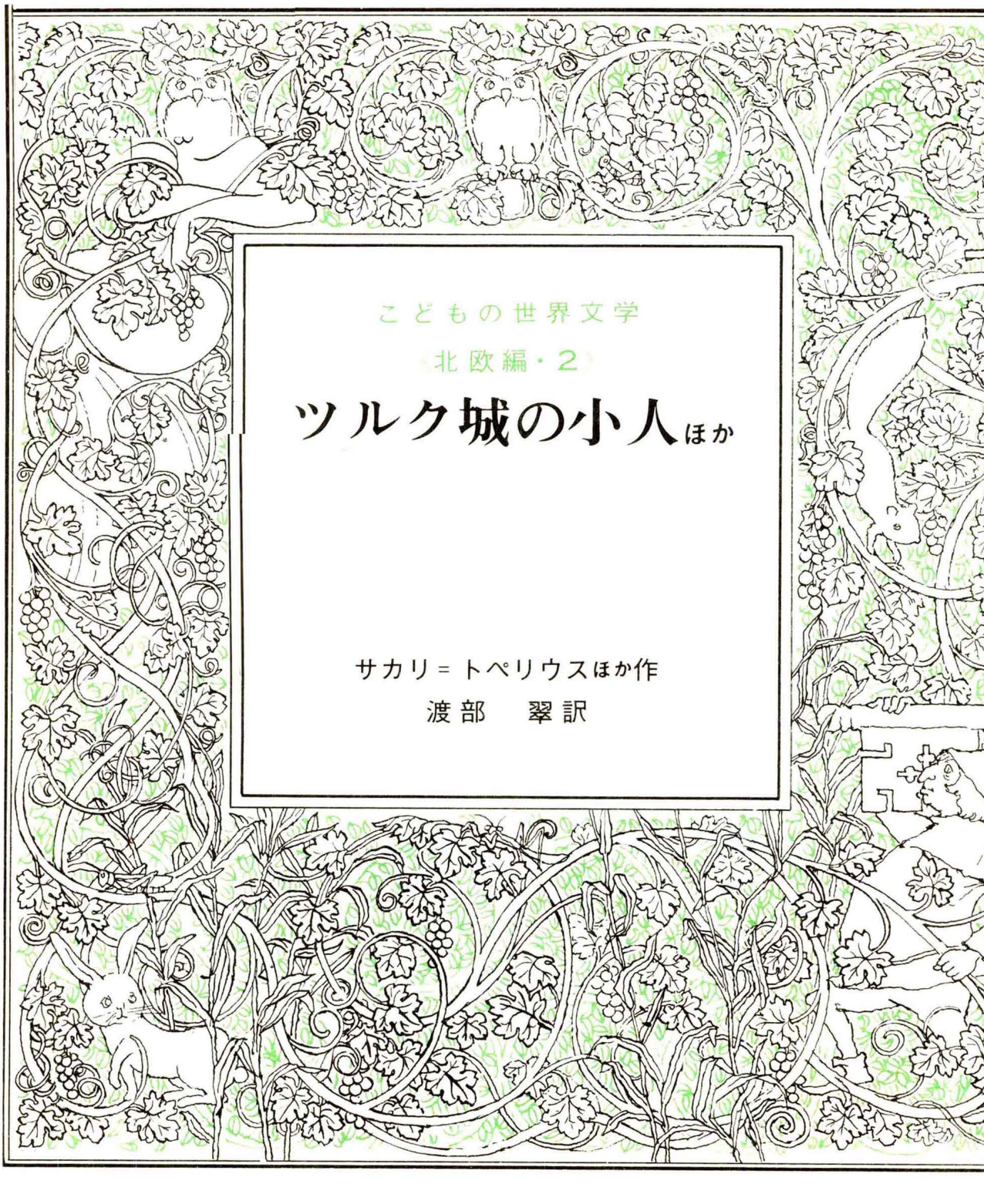


ツルク城（フィンランド）









こどもの世界文学

北欧編・2

ツルク城の小人ほか

サカリ＝トペリウスほか作

渡部 翠訳



もくじ

ツルク城の小人 (トペリウス)	10
バルテルくんの冒険 (トペリウス)	63
バルテルくんと、しまもようのスカート	63
みそらが丘のおさとう坂で	86
なまけものは、髪の手をひっぱられます	96
ロビンソン・クルーソーになりたいな	106
バルテルくんの、おおかみたいじ	125
ミルザ王子とミリヤムひめ (トペリウス)	145
ペトリと魔法使い (スワン)	183
物語を読んだあとで	

森と湖の国の二人の作家	高橋静男	212
海を、自動車で走れるの	サツ・ウッド	216
世界の妖精物語	神宮輝夫	218
「ツルク城の小人」の読書会から	北川幸比古	221
おかあさんのためのフィンランド児童文学史	高橋静男	227
訳者・画家の横顔		234





《責任編集》

神宮輝夫

関楠生

安藤美紀夫

塚原亮一

(日本編) 鳥越信

装本 大橋 正

扉 安野光雅

さしえ 福原幸男

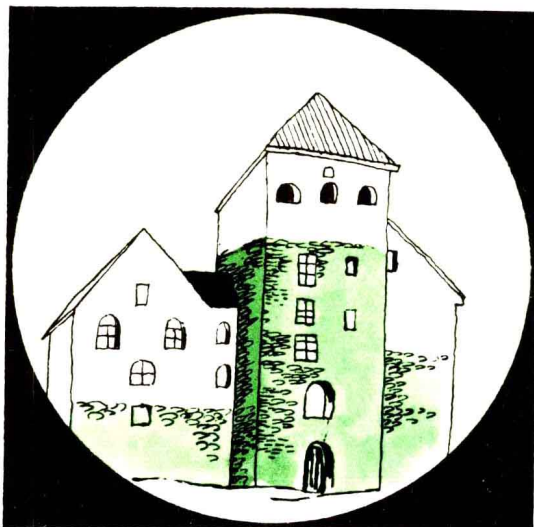
扉写真 仁田三夫

ツルク城の小人 ほか

サカリ = トペリウス作

渡部 翠 訳

福原 幸男 絵



ツルク城の小人



むかし、むかし、小人のおじいさんがいました。年は七百歳で、ツルク城（フィンランドのむかしの首都ツルク市にある、中世にたてられたお城。）の地下の、あなぐらに住んでいました。まっ白いひげは、おじいさんのこしのまわりを二まわりはまわるほど長かったし、こしといたら、古い鉄の弓を、おもいっきりひきしほったみたいにながってしまいました。

おじいさんは、フィンランドじゅうの小人の中で、いちばん年よりだってことが、こじまんでした。ああ、そうそう、もう一人、五百五十歳の小人が、中央教会（ツルク市にある、れんがづくりの古い大きな教会で、ツルク城とならんで、市では高い建物。）に住んでいて、この小人は、ツルク城の小人じいさんのことを、自分のおじさんだ、といっていました。



フィンランドじゅうの小人は、みんな、ツルク城の小人じいさんのことを、小人族のかしらときめていました。でも、このかしらは、国じゅうを秩序正しく、きちんとおさめようとするので、小人たちはみんな、こわがってもいきました。この小人じいさんは、とっても人がよくて、まあ、ちょっとばかり、へんなものが好きだってことだけをのぞけば、じつに正直で、りっぱな小人でした。

じいさんは、ほら、あの、「あなぐらとりで」っていわれている、ツルク城の地下の、ふかいふかいあなぐらに住んでいました。むかしは、罪人の中でも、おもしろい罪をおかしたものがいれられていた所です。いれられたがさいご、もう一生、二度とお日さまをおがめっこないって所でした。そこを、小人じいさんは、自分の好きなように、できるだけ住みごちよく、できるだけりっぱにかざりつけていました。

そこには、なんでもありましたな、じゃりだの、ごみの山だの、古い化石だの、こわれたつぼだの、ぼろぼろのしゅろむしろだの、いすの足のきれっぱしだの、こわれたおもちゃだの、がらくたなんなんでも、ありとあらゆるものがそろっていました。あなぐらとりでは、くもの巣でねんいりにかざりつけられ、ゆかは、もう何百年もひっそり光っている、小さな水たまりでかざられていました。

小人じいさんは、この、いごこちのよいすみかで、気ままにのんびりとくらしています。

した。お客をよぼうだなんてことは、めったに考えませんでした。

ところで、ちかごろ、ツルク城の小人じいさんは、ほかの小人や小人じいさんたちが、どうも氣にくわないのです。

「まったく、ちかごろの世の中ときたら、どいつもこいつもなつとらん。」じいさんの口ぐせは、いつもこうでした。「ちかごろの小人ときたら、せいぜい、おもちゃの城を作るか、子どものおもちゃをなおすか、長くつみがきか、ゆかをはいたりするぐらい。まったく、なんの役にもたちやあせん。人間はみんな、やつらをばかにして、ちかごろは、クリスマスの夜にさえ、プーロ（おこめのミルク煮。さとうとシナモンをか）一ぱいもごちそうしてはくれんじゃないか。わしらの時代の小人じいさんたちを見せてやりたいわい！ わしらは、とりでをたてたり、岩をはこんだりしたもんじや！」

それでも、じいさんには、二人だけ古くからの友だちがいて、二人とも、じいさんとおなじ、がんこでしっかりものでした。いまではもう、この二人の所へさえも、たまにたずねていくだけでした。

二人というのは、中央教会の小人と、もう一人は、年おいた城の番人、マッティリキビネンじいさんでした。ツルク城の小人じいさんと中央教会の小人は、二十年に一度、おたがいに、たずねあうことにしていました。





